

昭和五十九年四月二十九日郷土研究会資料

第一三一回

史跡めぐり資料（東松山地区）

菅谷館跡

県立歴史資料館

箭弓稲荷神社

松山城跡

吉見百穴

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

第一三一回史跡めぐり案内（東松山地区）

とき 四月二十九日（日）天皇誕生日

集合 南越谷駅前 午前八時 ○分集合 八時二十一分発（武蔵野線）

行先 南越谷駅 ー北朝霞乗替 ー朝霞台（東武東上線） ー嵐山下車

コース 県立歴史資料館 ー菅谷城跡 ー嵐山駅 ー東松山駅 ー 昼食
 箭弓稲荷神社 ー牡丹園 ーバス ー吉見百穴 ー訟山城跡 ー帰路

案内者 山崎善司 理事 連絡先 ☎6213733

参加費 三〇〇〇円也、（交通・保険・見学・資料代含）
 但し、昼食は各自持の事（食堂有り）

申込 葉書にて住所・氏名・性別・電話を記入の上、市立図書館内管理係迄。

主催

越谷市越ヶ谷東
 越谷市東越谷四一九一
 市立図書館内

越谷市郷土研究会

☎6512655

畠山重忠と菅谷館跡

畠山重忠は、長寛二年（一一六四年）、畠山荘司重範と父とし、相模の名族三浦良綱の旗本として、武蔵国畠山（現大宮郡川本町畠山）に生まれました。
 寿永四年（一一八〇）、源頼朝が伊豆石籠山、挙兵したとき、父の重忠が平氏と仕立てられたため、頼朝十七歳の重忠と平氏、属し源氏方の三浦氏に攻められた。その後、頼朝に仕え、鎌倉入りや富士川の戦い、は先陣をつとめ、宇治川での一合の合戦では、かすかすの手柄をたてました。また、奥王と丹之との争いを調停するなど、武蔵武士の代表的人物として人々の信望を集め頼朝から厚く信頼されていました。
 頼朝の死後、和田義盛などと争い、二代村長を擁護するたて政治に専心しましたが、北条氏に謀殺されました。四十二歳で亡くなった。鎌倉時代の史書『吾妻鏡』によると、元永二年（一一二〇）六月十九日、『鎌倉に買取り』との急報に接した重忠は、わずかの百三十四騎の部下と率い、「小（男）桑野菅谷館」を出発し、同月二十二日、二飯川（現横浜）で義盛のことに北条氏に困まれ、部下とともに討たれたとあります。
 畠山町菅谷にあるこの城跡が、その「菅谷館」ではないかと古くから言われてきました。城跡の西には鎌倉へ通じる街道跡が残されており、この城跡のどこかに重忠の館があったことも充分考えられます。
 現在この城跡は、縄張りや土塁、空堀の構造から推定して、戦国時代末頃に最終的に築城されたものと考えられています。

埼玉 埼玉

菅谷館跡説明板

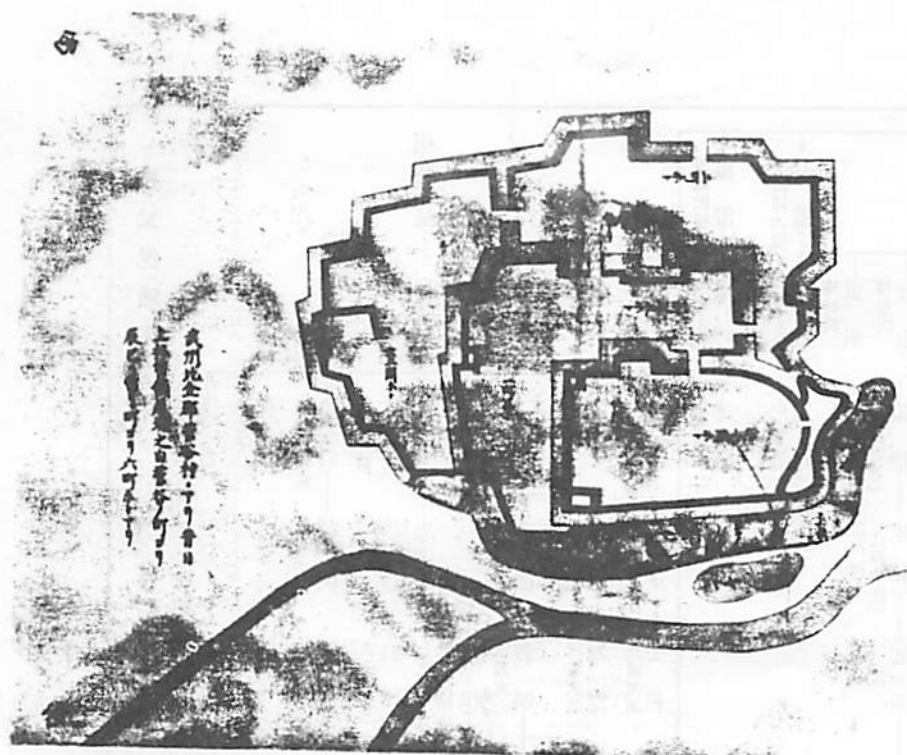


畠山重忠の像

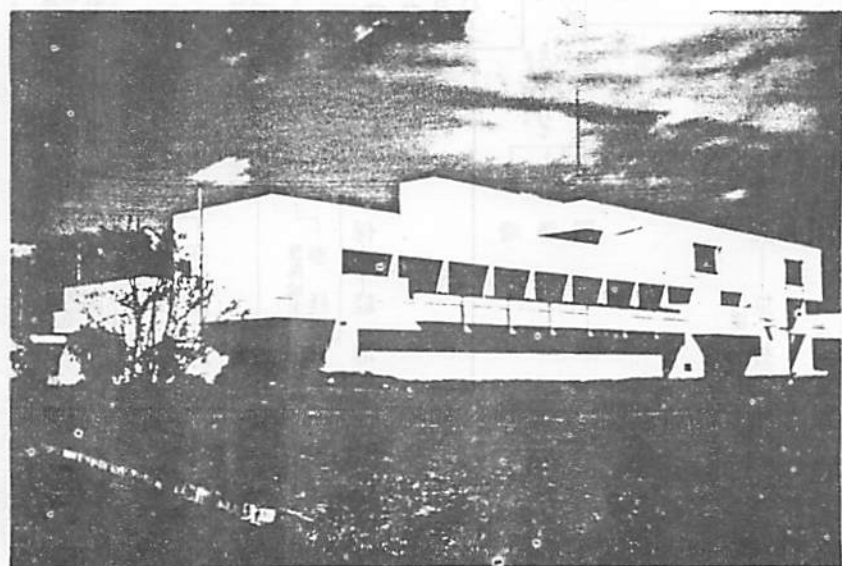


菅谷館跡の碑

武州菅谷城



菅谷館跡古図 (国立史料館蔵)

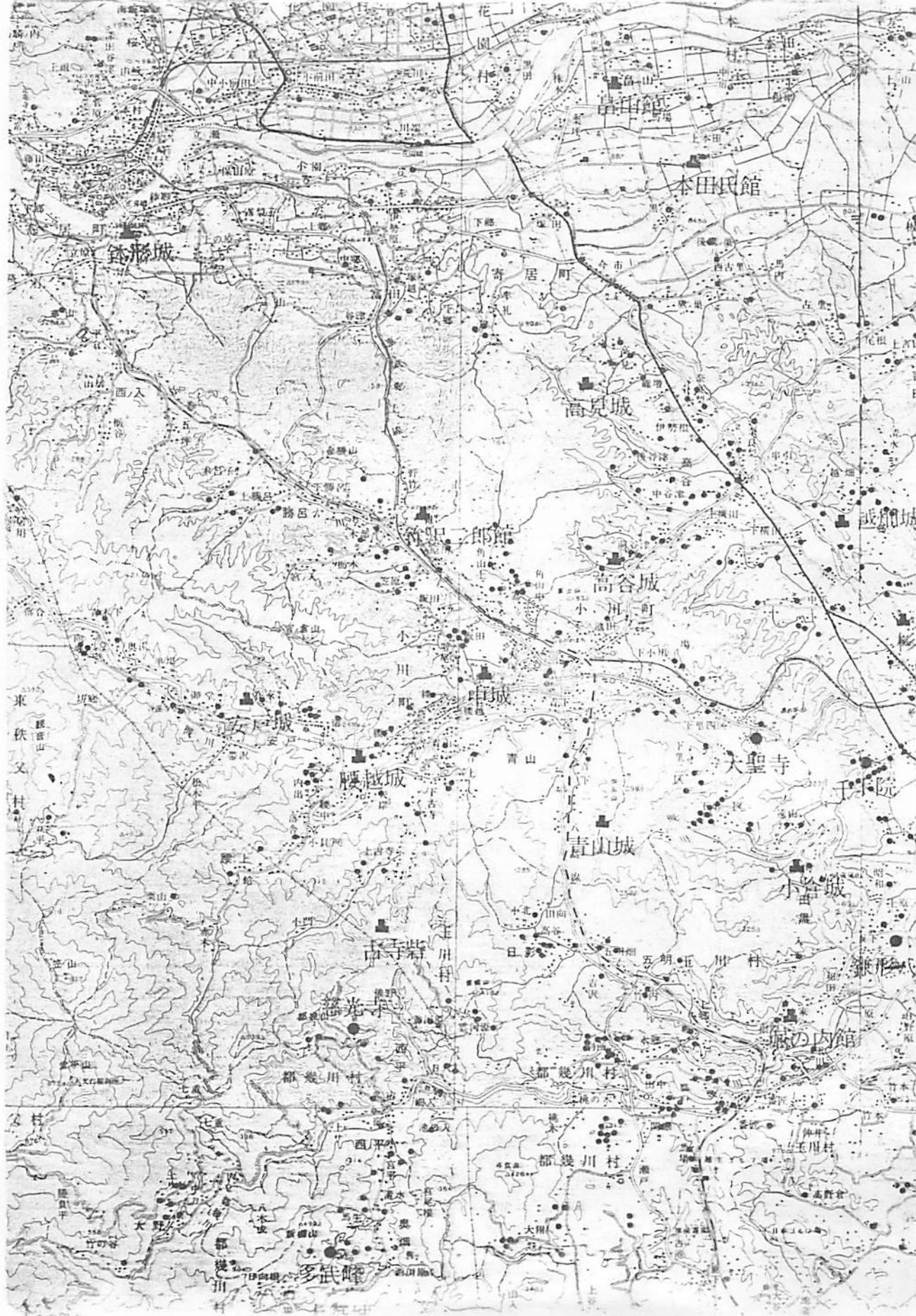


県立歴史資料館

菅谷館跡周辺の文化財地図



この地図は、建設省国土院院長の承認を受け、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。
(複製権) 昭和三十九年三月



菅谷城 比企郡菅谷村大字城

菅谷城は、鎌倉街道に面し、南は都幾川の西の断崖に望む要害景勝の地である。本城の本丸は、古くは畠山重忠の居館であつたが、後長享年間(1487、89)太田源六郎資康により改修され(道灌の子)戦国期の城郭と化した。為、鎌倉期の遺構は一部を残すのみとなつた。城域は、十町六反九畝(三万二千坪)であり、大部分は山野と水田に化しているが、遺構は完全に保たれている。現在では、城郭の内に県立歴史資料館が建てられている。

菅谷城内の本丸の一部は、関東の名族で北武蔵に威を誇つた、坂東八平氏(秩父・土肥・上総・千葉・三浦・大庭・長尾・梶原)の一つ秩父氏(畠山に居を移して畠山氏を称した)畠山荘司重忠の菅谷館として知られている。

畠山氏は恒武平子、武蔵五郎良文の子忠頼を祖として秩父郡中村郷に館を構えて秩父氏を名乗り、武蔵総検校職を世襲していた。

重忠の父は秩父荘司重能と称したが、畠山荘の荘司となるに及び、武蔵国大里郡畠山(現川本村)に館を構えて畠山氏を名乗つた。

畠山重忠は鎌倉武士として著名であるが、父重能母は三浦半島の豪族三浦大介義明の女の間に長安二年(1164)畠山の館に於て生れた。畠山荘司次郎重忠である。

吾妻鏡に、文治三年(1187)十一月十五日「畠山重忠武蔵国菅谷館に引籠り、反逆を發せんと欲せんと由」又、元久二年(1205)六月十五日「小倉 郡菅谷の館を出で」とあり、重忠は菅谷の館に住している。いづれにせと元久二年六月十九日幕府方の謀略の爲、この日菅谷の館を出て鎌倉に向つたが、途中二俣川で鎌倉方の討手と出会い鶴ヶ峰で討死した。四十二歳であつた。

室町時代には、「梅花無尽蔵」に「長享戊申二年(1488)八月十七日入須賀谷(菅谷)之地平沢山門太田源六資康之軍營」と記されている。

城主太田源六郎資康は、太田道灌の家督で、道灌の死後扇谷上杉定正の陣營を去り、両上杉の争つた長享年間の大乱には、山ノ内家の拠点鉢形城の前線基地菅谷陣營にて城(菅谷城)を預つていた山内顕定方の武将であつた。

長享二年(1488)六月十八日、扇谷上杉定正の軍勢七百と山内上杉顕定方二千余騎は武蔵の須賀谷原(菅谷村)に對陣して激戦を展開した。此の菅谷原合戦を、漆谷万里(集九、連歌師)の「梅花無尽蔵」には「此の時武蔵の比企郡菅谷に太田源六資康の陣營あり、二年六月十八日には兩軍の大合戦有りて、戦死者七百余人、馬の斃るゝもの數百」とあるから、相当激しい戦であつたろう。合戦の余塵さめやらぬ八月十七日に万里は、菅谷陣營の太田源六資康を訊ねた。資康は陣營中に滞留中の詩客万里に訣別の前夜、即ち九月二十五日に、万里送別の為に平沢山の白山社境内で、詩歌の会を催した。(県指定史蹟太田資康詩歌会跡)

小田原北条時代の菅谷城は、北条方の小泉掃部助が城代となつてゐる。従つて武州松山城関係の支城と考えられるが明らかではない。

菅谷城が、前哨的な位置を占めたのは、両上杉の対立時代には、山内上杉の拠点鉢形城と扇谷上杉の拠点川越城との接点であつた為に重要性があつたからで、北条氏の関東制圧の戦略的意味からは、その価値が失なはれて歴史的重要な衝点は、松山城に移つたものと思われる。尚、菅谷城の北4KMに市の川の対岸高地に杉山城、西4KMに小倉城、東4KMに青鳥城、その東に松山城、南に野本城がある。

東松山市

東松山市は、人口約5万5,700人、面積66,098㎡、昭和29年7月市制施行、市内に東武東上線東松山・高坂駅がある。

東松山市は、丘陵に囲まれた、荒川支流の市の川流域の都市で、古くから開けた土地で、古墳や古代住居跡が数多く発見されている。

吉見百穴の南の丘陵上に松山城が築かれ、町はその城下町として発足したが、天正18年(1590)に城が落城したのを境に、町も次第に現在の位置に移った。此所は江戸から上州への脇往還と八王子方面と日光とを結ぶ脇往還との交差する地点に当り、江戸時代には日光社参の為の脇往還として賑い、宿場としての町を形ちつくつたのである。

以前には、松山町と称したが、市制施行に当り、愛媛県東松山市との混同を避けて東松山市とした。

市内産業としては、ディーゼル機器を中心とする自動車部品の生産が盛んである。周辺の農村部では、西瓜・梨・コロ柿等の果樹栽培が伸びている。

付近の丘陵は県立比企丘陵自然公園になつており、市内には、古代の集落的墳墓である吉見百穴、ツツジの名所岩殿山、將軍塚古墳、箭弓稲荷神社や牡丹園等名所や旧跡が多い。

又近年ゴルフブームに乗つて、ゴルフ場もろヶ所に造られて賑わつている。

箭弓稲荷神社

長元元年(一〇二八年)下総(千葉縣)の城主前上総介平忠常は下総に乱をおこし安房上総下総と手中に収め大軍を率いて波竹の勢いで武蔵国へ押寄せた。兵元三年秋忠常追討を命ぜられた冷泉院の判官代甲斐守源頼信多田満仲の子頼光の弟は武蔵国比企郡松山野久原に本陣を張り一泊した際に当社にまうて敵退治の祈書を呈し太刀一振馬一匹も奉納して一夜祈願した。その晩白羽の矢のような形をした子雲が起つて敵陣の方へ飛んだ。一説に白鶴が東の神の弓矢を投げた夢を見たのを見て神様のお告げと致し。たたちに兵を起して敵陣に攻めこんだ。中流の兵は不意の攻撃にオオオオとなく敗れ三日三晩の戦いで潰散した。頼信はこれを再びかいせんの際立派な社殿を再建し「箭弓稲荷大明神」と称したと伝えられている。現在の社殿は享保三年(一七二八年)領主島田彈正の社地四町七反余を免除し四方の信徒と回つて建造したといわれている。明治二十九年に郷社と定められ、大正十二年には県社に昇格し衣食住はもとより商売も明運の神として広く知られている。また境内にホタン園のあり、関東陸一の名園といわれている。

埼玉縣

箭弓稲荷神社説明板

箭弓稲荷神社 市内箭弓町

東武東上線東松山駅の南西の地に、箭弓稲荷神社がある。創建は平安末期の長元元年（1028）と云われる。同社は、商売繁昌・開運の神として知られるが、社伝によると、「前の上総介平忠常は、下総国で乱を起し、破竹の勢いで安房・上総・下総の三ヶ国を攻め従い、長元三年（1030）秋、大軍を率いて武蔵国に攻め込んで来た。此の時朝廷では、丹波の鬼退治で著名な源頼光の弟甲斐守源頼信に忠常の追討を命じた。（平忠常の反乱は長元元年六月の事である。此に対し朝廷では檢非違使平直方と中原成道をして忠常討伐に派遣した。直方や中原は忠常の威勢の前に之を征する事が出来なかつた為に翌長元二年十二月に免官に処せられ、その後任として翌三年三月、源頼信が忠常追討を命ぜられてゐる）

命を奉じた頼信は、武蔵国に入り松山の野久ヶ原に本陣を張つた。此の時此の地に鎮座した明神社に朝敵退散の願文を掲げ、太刀一振と馬を奉納して戦勝を祈願したところ、頼信は白狐に乗つた軍神から弓矢を授つた夢を見たと言ふ。そして白羽の矢の形をした白雲が敵陣の方に飛んだのを見て、頼信は神のお告げと感じ、直ちに兵を率いて敵陣に攻め入つた。不意を突かれた忠常は陣容を整える間も無く散乱し、三日三晩の戦鬪で潰滅した。頼信は、大勝した礼として壮大な社殿を寄進して、当社を夢に因んで「箭弓稲荷大明神」と称したと云う。（此の地の地名野久ヶ原の野久稲荷から取つた名とも云われている）

箭弓稲荷の現在の社殿は、元禄年間（1688）1704）建立の物とも享保三年（1718）の再建とも云

われ明確ではない。その社格は明治二十九年に郷社、大正十二年には県社に昇格、広く信者の崇敬を集めてゐる。現在、商売繁昌・開運の神として参拝客を集めて賑わつてゐる。

例祭三月初午の日に行われる初午祭りは、宝徳三年（1451）の初午の日に、川越の左金吾王が大願成就の法楽を執行したのが始まりと云われる。又一節には太田道灌が此の祭りを始めたとも伝えられ、古くから盛大な行事として知られてゐる。

四月下旬から五月上旬の巳の日の夜に行なはれる「巳の晩祭り」は養蚕家を中心とした信者が各地から集まり、神社に参籠して（おこもり）歌や踊りで一夜を明かす慣わしとなつてゐる。

箭弓牡丹園

箭弓神社境内にあり、広さ5,000㎡の地に、1,000余株の牡丹が植栽され「箭弓牡丹園」と称されているが、毎年五月上旬、花の季節には牡丹祭りが催され人出で賑わい、当地の名物となつてゐる。

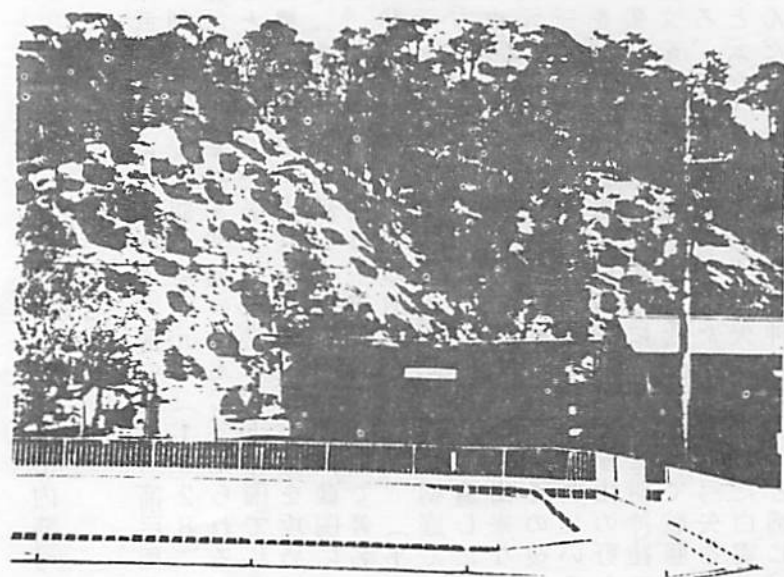
上田朝直建立青石塔婆

市内神明町112にあり、高さ2.8m、幅0.6m、緑泥片岩からなる板石塔婆で南無妙法蓮華經の題目が刻まれているが、長い間の風雨の為損耗が激しい。松山城主上田能登守朝直が元龜二年（1571）戦没した部下の為に冥福を祈つて建立したものである。

朝直が松山城主であつた永禄四年（1562）九月、上杉謙信の大軍に攻められ落城、同年十二月朝直は、北条氏康・氏政父子の応援を得て、翌三月奪回し再び城主となる

朝直は、深く日蓮宗に帰依し、後入道して安独齋と称した。朝直の墓は、平領東秩父村浄蓮寺にある。

塔婆は、東松山駅前通りを行き、川越方面からの交差点を右折して、しばらく行くと右側にある。道路から20m程入り込んでいたので、土地の人が清正公様と呼んでいる祠を目当に行くと呼り易い。



吉見の百穴

吉見町 比企郡

吉見町は、人口1万4,800人、面積38,77㎡k、比企郡の東部、荒川右岸にあり、荒川と市ノ川に挟まれた農村で、中世には吉見荘と呼ばれた所である。昭和29年7月、東吉見村・西吉見村・南吉見村・北吉見村の4村合併して吉見村となり、昭和47年11月町制を施行した。昔から荒川の出水による被害が多かつたが、北吉見村の名主原作兵衛が、延宝4年(1676)、村内西堂に西堂大囲堤と呼ばれる長大な堤防を築いて、村を水禍から救った。

地域の西部にある吉見丘陵には、古代遺跡があり吉見百穴や黒岩横穴古墳は有名である。又丘陵上には松山城・金蔵院があり、吉見御所には、坂東11番札所の安楽寺があり、境内に三重塔があり、金蔵院の宝篋印塔と共に県文化財に指定されている。低地部では稲作が行なわれ、丘陵地では、近年イチゴ栽培が盛んで、町の特産品となっている。村域西部の丘陵地帯は、県立比企丘陵自然公園に含まれる。

吉見百穴 北吉見

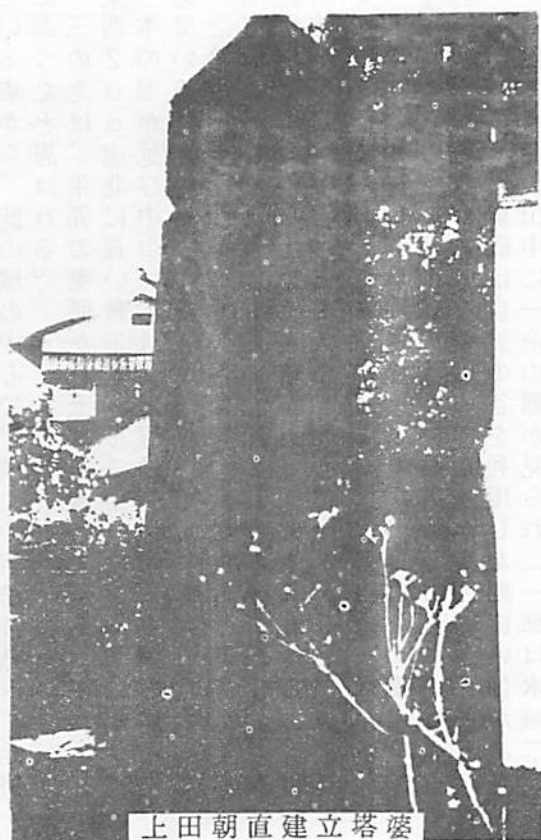
凝灰岩の丘陵地帯に造られた古墳時代後期の横穴式古墳群である。江戸時代から人々に知られ、明治20年、当時学生だった坪井正五郎氏が、帝国大学の後援で発掘調査して、先住民のコロボックル人の住居跡を後年墓穴に利用したと云う説を発表して、当時の学界の論争を呼び起した。

然し、大正末期には、古墳時代後期の代表的な横穴式古墳群である、との学説が確定した。

戦時中、地下工場として一部が破壊されたが、戦後は保存に力が尽され、現在219の横穴が確認されている。

吉見百穴のヒカリ苔

吉見百穴の最底部にある二つの横穴の中に生えているもので、暗い横穴の底や壁が微かな光を発している。ヒカリ苔は山地に多く、関東平野にあるのは植物分布上、極めて貴重とされている。



上田朝直建立塔婆

松山城 北吉見五ノ耕地

吉見百穴のある丘陵上に築かれた山城である。東・南・西の三方が市ノ川流域の沼湿地と云う自然の要害の地に位置している。

幾百とある武蔵の古城の中で、此の城程、数々の合戦に巻込まれ、戦国有為転変を経、幾多の落城哀話を今に止める城も希れであろう。

関八州の中枢、武蔵の原がそろそろ山勝ちになるあたり、比企の丘陵が水田に落とす所に、此の城はある三方に水田が開け、西南は市ノ川が麓を取巻き、北に連なる尾根を深い堀で幾重にも堀切りその備えとしている

今城跡を訪れる人は、先づその堀の広大さに驚くであろう。土塁はほとんど見られず、堀によつて防御を固めている。言つても良い。

東松山市から市ノ川を渡ると、吉見橋を渡り切つた所で道は左右に分れる。左へ行けば史跡「吉見横穴墳墓群」通称「百穴」で、道を右手に行くと、左側の山塊が松山城跡で、左側に松山城本丸に至る険しい山道がある。登り詰めると、切通して左上が本丸、右上が虎口守りの曲郭である。

本丸は、今堂宇が建ち東西30m、西南の隅に虎口の守りの檜台を置き、東北隅にも現在松山城の碑の立つ檜台がある。

二の丸は、そこから深さ10m、幅15mの大きな空堀（雨期には水堀となる）を隔て、東側で、それを継ぐ土橋が二本存在する。二の丸は、城内で一番広い曲郭で

更に幅10数mの空堀の外に、幅5、6mの帯郭が取巻いている点から、此の城の中心で、城主の居館は恐らく此処にあつたと思はれる。

三の丸は、帯郭の東側から土橋を渡して連結しており、東西20m南北に長い敷地で、そこから南側斜面に向つて三本の堀が延び中の一本は沼と湿地で往時の水堀の様を留めている。

之等の主要な曲郭の北・西に幾つかの曲郭が見え、東松山市街に面した部分で本丸の北側を兵糧曲郭と呼んでおり此処へは本丸から土橋で連絡がある。此より北側の曲郭は名前が不明だが、古書には「広沢曲郭」と云う名が見えるのであるうか、幾つもの曲郭が続いてある。

此の当り山麓は何れも断崖となり、各曲郭との間に向つて縦堀が入り、一番西側の大きい縦堀の下り切つた所に、岩室観音が祀られている。このあたりが裏門の跡である。又、三の丸の東側は自然の谷を利用した幅広い堀があり、その更に東側の山中に一条の堀が見られ（一部は水堀）、城を尾根から幾重にも切り離している。そして、南斜面にも麓に向つて四本の縦堀が存在する。

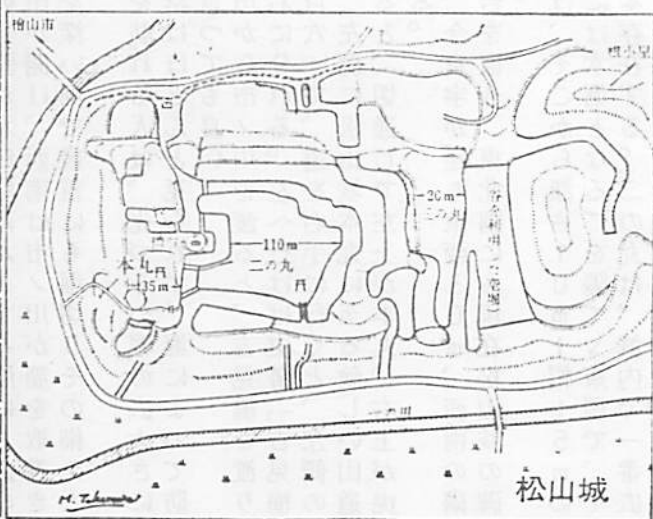
本丸附近は、きれいな折（おり）歪（ひづみ）等が見られるので、比較的新しい時代の形が残り、三の丸の附近には、複雑な曲郭配置であるので、古い時代の遺構を残している。

松山の名は、文字通り松の木の山で、今の城域の一部に小字名で松山の名があり、それを城名とした。そしてその支配地を松山領と呼ぶ様になつた。城下町名も松山本郷と云い今日に致つている。

尚、今の城地の北方にて周囲を山に囲まれた地に、根小屋と呼ばれる地名が残つているので、昔時は此の辺迄、松山城域であつた事と思はれる。



松山城跡入口



松山城概要図

松山城の創建は、応永六年（1399）上田左衛門尉友直の築城によると云われる。上田友直は、源氏の棟領源頼朝の弟、蒲の冠者範頼の鹿流、吉見氏の後裔であり、扇谷上杉の重臣上田氏の養嗣子となつて、外秩父安戸に応永四年（1397）安戸城を築き、その二年後、祖先縁りの吉見の地に松山館（城）を構築したと云われる。

松山城に居所を移した友直は、旧城安戸城を山田伊賀守に、腰越城を難波田隆輝にそれぞれ守らせて松山城の兩翼とした。友直は父祖の地を復活したので、吉見村宝性寺に亡父友義の靈を祀つた。応永十一年（1404）家督を嫡子上野介範直に譲り隠居、城下の妙光寺・賢住寺を合併一寺として現妙賢寺とし上田家の菩提寺とした。賢友大居士範直は、禅秀の乱の時、前管領山内禅秀が足利満隆と謀つて関東公方足利持氏と管領扇谷憲基を亡き者とせんと不意に兵を挙げた。此の時上田範直鎌倉扇谷に出勤中の為、家臣の難波田隆輝・萩原五兵衛・新井小五郎・内山外記・市川美作等急拠召集して鎌倉隨一の要衝六本松の高地に陣したか、禅秀の大軍に攻められ応永二十三年（1416）十月十六日範直以下討死した。法名、賢調大居士

永享二年（1432）範直の子綱直（範綱とも云う）は松山城を修築し、同十一年（1439）難波田為輝に命じて腰越城をも修築させた。永享十二年（1440）鎌倉管領府は執事上杉憲実を派遣して反対党一掃の軍を起した。此の時松山城外の野本ノ原・唐子方面で合戦有り、松山城より難波田道隆出張したが、野本ノ原にて討死す。長祿二年（1457）上田綱直は、主家扇谷の重鎮太田道灌に松山城の修築を頼んだ。道灌は朋友山田氏の為に、

大々的に繩張をし直し、武蔵野の一角にその城姿を現して今日の松山城となつた。

寛正二年（1461）古河公方成氏は、不意に兵を起して松山城に攻め寄せた。城主上田綱直は鎌倉に出仕中の事で、城代難波田善輝・同政輝父子始め難波田広宗・山田氏元・同氏次等防戦したが、数日にして開城、上田綱直は止むなく腰越城に拠し、本領安戸城の兵や松山城落居の兵を集めて、松山城奪回を計り、松山本郷に陣を張り激戦数ヶ月、その年の暮に奪回に成功した。

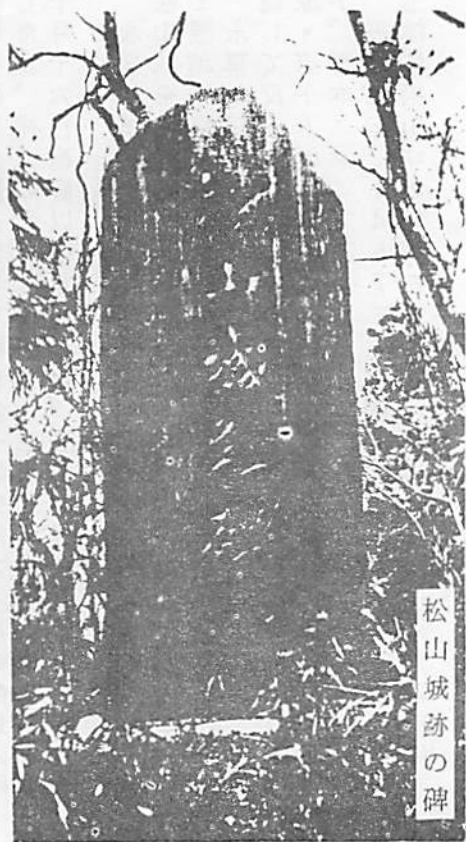
文明六年（1474）には、足利成氏再び大軍を催して松山城を攻めた。城主上田綱直之を城外に迎え討ち、岩殿山に本陣を構え、苦林野に戦つたが遂に討死した。主を失つた松山城は間もなく成氏の猛攻を支え切れず落城した。足利成氏は重臣関根重隆を松山城の守将として守らせて、古河へ引揚げた。綱直討死の後、その子広直（幼君）を立て、難波田・山田等の諸將は、腰越・安戸の城に拠して松山本城の奪回を計つた。

文明十八年（1486）七月二十六日、扇谷上杉家の忠臣太田道灌、主扇谷上杉定正の為に謀殺される。山内顕定は道灌のいない扇谷、恐るるに足らずと、鉢形城を出て高見ヶ原に陣を布く、扇谷定正は古河の成氏に援を頼む、成氏これに応じたので、松山城は自然扇谷の城となり上田広直に帰つた。広直は幼少兵庫助と云い鎌倉に有つて定正に仕えて来たが、晴れて父祖の地松山城に帰つた。

長享二年（1489）山内と扇谷との対立は益々激しく正月には松山城を本拠とする扇谷定正は城外に布陣して山内顕定に対した。二月五日には、扇谷の本領近くの実蔭原



松山城本丸跡



松山城跡の碑

に顕定出張し合戦す。川越から馳付けた定正軍が勝利す。六月八日には、菅谷原に陣する山内顕定に向う定正は、山内顕定と対立している元重臣長尾景春意玄の援を得て勝利を収めた。

同十一月十五日、鉢形城近くの高見ヶ原にての合戦が最大のものであつた。前の戦場菅谷原より12km程西の地点での合戦である。顕定軍三〇〇〇の布陣する市ノ川の北今市台地向う定正軍が市ノ川を渡ろうとする高見原で合戦が行なわれたので高見ヶ原の合戦と云う。この戦に松山城主上田広直が討死すると云う激戦の末扇谷軍の勝利に終つたが、定正はこれ等の戦を勝利したが、将卒皆疲れ度々の戦いに兵力激減した事を慨嘆させている。

明応元年(1492)九月、両上杉は又も立河原に激闘を繰返した。松山城よりも出陣、城主上田上野介栄直は戦死した。

明応三年(1494)十月、再び高見原に山内顕定と戦つた定正は、勝に乗じて深追ひして荒川を渡り五十子に陣する時、河原にて落馬したのがもとで、五十一歳の生涯を終る。扇谷上杉は養子朝良の時代となる。

上田栄直の戦死の後、弟民部祐正直が城主となる。正直は両上杉の骨肉相喰む姿に見切りを付け、同僚の長尾為景が北条早雲に味方したのを見て、意を決して早雲の旗下となり、松山城には幼子又次郎政景・老臣難波田広定・木呂子友重等諸将を残し、嫡子上野介政広と共に、永正七年(1510)、神奈川権現山に城郭を築き、早雲と連合を計つて扇谷に抗したが、成功せず大軍に攻められて、遂に城に火を放つて遂に、七月二十九日落城す。暫く松山城に帰らず諸々に隠れ住んでいたが、三戸駿河守の計いで嫡子政広が松山城主となり、正直は隠居謹慎の身となり、

上杉家に無事復歸する事が出来た。

永正十五年(1518)上田正直は松山城内にて病を發し、同十二月十六日波乱に富んだ生涯を閉じた。

大永三年(1524)二月二十七日、その弟上田上野守重直も四十二歳で松山城中に没した。

享禄元年(1528)正月、又も両上杉は争いを起し、同二年夏迄、松山附近を中心として、小競合が続き戦はれた。北条氏綱・氏康父子は、此の期に享禄三年(1530)六月、大軍を以て小田原を發し北関東制覇に乗出した。両上杉は同志討を止めて、急拠対北条の防禦態勢を固めた。享禄三年六月十二日、上田政広・同政景・難波田政輝・同玄宗・同広定・木呂子友重・山田式部等の松山勢五百余騎は、上杉軍の先陣として出陣、所沢・府中・世田谷等に転戦し、北条軍を悩ませた。

天文五年(1536)九月二十日、上田源左衛門直義、松山城中にて没。

天文六年(1537)七月十五日、北条氏綱は、上杉朝定の本拠川越城を攻め、遂に攻略した。上杉朝定は松山城に逃げ走つた。北条軍は追つて松山城に攻め寄せた。城主上田政広は、川越より逃れた上杉朝定を迎え入れて、四方の要害を嚴重にし、防備を堅めた。七月十八日夜、北条軍は松山城下を悉く焼き尽し七里四方が灰尽と化したと云う。同二十日、難波田憲重の率いる精銳は城を討て出て、敵陣を突くずし戦つたが、味方の疲れ激しく敗色見えたので城へ引返す時、北条家の将山中主膳追て来て「悪しからじ善かれとてこそ戦はめ、などや難波田の崩れ行くらん」と問えば、「君を置きて仇し心を我持たば、末の松山波も越えなん」と返歌して城中に引あげたと云う。

岩室観音境内の絶壁にある、駒の馬蹄形の岩肌の窪みは、此の時難波田憲重が馬で城中に駆入つた時の馬の足跡である、今も言い伝えられている。

北条軍は攻めあぐねて、小田原に引揚げた。世人は此の戦を松山城の風流合戦と呼んで今に伝えている。

天文十二年(1543)五月十七日、上田民部大夫政景、松山城中にて病没す。

天文十四年(1545)十月、難波田憲重は上杉家人小野因幡守と共に、上杉家の使者として古河公方足利晴氏を訪れ北条討滅と川越城回復の援軍を乞うた。晴氏は願を入れて起つたので、上杉は全軍に督して川越城を取囲んだ。北条氏康は駿河長窪にて、今川義元と対陣中であつたが、陣中より引返した。

天文十五年(1546)四月二十日、北条氏康は夜陰に乗じて、十万の大軍で川越城を取囲んでいる上杉軍の後から攻め掛り、川越城中の守将北条綱成之に呼ぶして討て出て、氏康手兵八〇〇〇、城兵三八〇〇を以て東明寺口に戦い、上杉朝定以下八千有余の死傷者を出して上杉方の大敗北に終つた。松山の難波田憲重は東明寺口にて奮戦、手負を負い古井戸に落て討死した。此の戦を世に、川越の大夜戦と云う。

大勝した北条氏康は、余勢を駆つて松山城をも一気に攻略した。一方川越の乱戦場から命からがら僅か九騎で居城松山に逃げ帰つた上田政広は、北条方の旗が翻つてゐるのを見て驚き、腰越城・安戸城へと落ちて行つた。北条氏康は松山城に入城したが、堀和刑部少輔に松山城を守らせて、小田原に帰城した。

天文十五年（1546）冬、安戸城に籠つた上田政広は太田資正と謀り、松山城に夜襲を掛けて奪回した。此の時丸に、上田政広を三の丸に籠らせた。程無く小田原より北条軍押寄せた。此の時上田政広は、父祖伝来の松本城に城主として居れない不満があつたので、北条軍の誘いに乗り内応した。松山城は陥落、太田は逃れ、広沢は良く戦つたが、遂に討死した。此の広沢尾張守忠信の討死した辺を、後に広沢曲郭と呼んでいる。

天文十六年（1547）上田政広は、嫡子朝直に家督を譲り、入道して安楽斎と称した。此の年朝直の娘、川越の北条綱成に嫁した。又此の年、朝直は靈夢を見、それにより外秩父村御堂の浄蓮寺に帰依し、自分の菩提寺と定めた。永禄四年（1561）九月、越後の長尾景虎は、上杉家の養子となり、名も上杉輝虎入道不識庵謙信と名乗り、関東管領職を相続してその就任式を前例に倣おうと、上越の大軍を率いて進撃して来た。北条氏政は舅の武田信玄に援軍を乞うも成らず、籠城策を取る。麾下の諸城にも通達を發した。然し武蔵の諸城は謙信の軍威に恐れれをなして皆戦わずして軍門に降つた。謙信は難なく鎌倉に入り、鶴岡八幡宮にて就任式を挙行した。帰路関越の大軍九万を以て松山城に攻め掛つた。城主上田朝直始め全将一丸となつて防戦良く三千の城兵を以て死守した。謙信は策して武田・北条の援軍が發せられたので陣払したと見せ掛けた、城兵欣喜雀躍相抱いて欣び、大酒宴の後、腰越・安戸の兵は引揚げて行き、城兵は残酒に酔つぶれている所、東雲（しのめ）の刻、突然城の四方より大喚声が挙り銃声がとどろき、僅か一時にて落城した。此の戦で、老将上田政広、その孫上田榮直十九歳、榮直の妻狭霧、城主息女久姫等、松

山城頭の花と散つた。

上杉謙信は、松山城を取立てて、上杉憲政の末子七沢五郎を上杉左衛門大夫憲勝と名乗らせ、三田五郎左衛門・太田下野守・広沢兵庫助信秀・高崎刑部左衛門利春等騎馬二百騎、新兵二千五百余人を差副えて堅く守らせ、岩槻城主太田三楽斎資正にその監察を命じて越後に歸つた。

三楽斎は、犬數十匹を岩槻から連れて来、毎日松山城と岩槻城の間を往復させた。

安戸城にて奪回に燃る上田朝直は、川越城主の婿北条綱成と謀り、松山城奪回しようとして兵を挙げ城を取囲んだ。上杉憲勝は岩槻城へ援軍を乞う使者を出したが皆捕えられてしまつた。そこで日頃飼ひ習ひていた犬の首輪に密書を託して放した所、見事その任を全うした。犬達の手柄で変事を知つた岩槻城から、急使援軍が到着したので、上田朝直は、奪回を他日に期して一応引かざるを得なかつた。日本戦史の中で最初の軍用犬の創始として、後の世迄語り継がれている。

又此の松山城争奪戦で使用された鉄砲は、関東の合戦記録の中では最初の出来事で、記念すべき事である。

永禄四年（1561）十二月、上田朝直の要請により、北条氏康・氏政父子は、北条氏照・北条綱成を従え、三万余騎の大軍にて松山城を取囲んだ。城将上杉憲勝は直ちに軍用犬を使つて岩槻城の太田三楽斎に急を告げた、三楽斎も此の大軍では手も足も出ず、越後の上杉謙信に救援を走らせてその到着を待つより方法が無かつた。

城兵良く防いで保つた。明けて永禄五年正月七日、北条氏康は甲府の武田信玄に援軍を乞うた。婿の頼みに応じた信玄は、嫡子太郎義信以下二万五千余騎を率いて、正月二十八日、甲府を立ち、程なく岩殿山高坂城に着陣した。

之に依り松山城攻撃は熾烈を極め、猛攻に次ぐ猛攻でも落ちないので、甲州金堀人足による地下道を掘つての地下道戦や、高檜を築いて、その上からの鉄砲合戦等、双方秘術を尽しての、新様式の戦法を取入ての華やかな攻防戦が繰広げられた。竹束の鉄砲避けを考案して城中に攻め入りたりして、鉄砲にともなう戦術の転換の時代でもあつた。

上杉謙信は、毎日の様に報ずる「松山城危うし」の早馬に意を決し、雪深い越後より二月上旬出馬した。岩槻の太田三楽斎は、安房の里見に後詰を頼み、松山城援軍を促した。

北条・武田の寄手は、謙信の援軍の来ぬ内にと一計を案じ、三楽の使と称して勝式部少輔なる者を城中に入れ、謙信は雪の為援軍出来ぬ事を告げさせ、武田軍奉行飯富景仲の松山城安堵状を届けたので、上杉憲勝以下諸將協議の上三月三日開城した。

上杉謙信は、三月六日武州石戸城（現北本宿）に、陣したが、落城の後であつた。怒つた謙信は憲勝の人質の幼児を引出し吊切りにして首を跳た。（此れ以来関東の諸將の信を失い、忍の成田の前例もあり、急速に味方する者が減少した）

謙信は、私市城（キサイ）を落して怒りを鎮めたと云う荒川を狭んで一ヶ月も松山奪回の期を狙い、対陣したが、雪中強行軍で兵は疲れ、先の吊し切り事件により、味方の武將の中より脱陣する者多くなり、謙信は止む無く私市城へ引上げた。

松山城は、北条氏康・武田信玄入城し、以前の如く上田朝直に之を堅く守らせた。

永禄七年（1564）、岩槻の三楽斎は、息氏資の為に城から追放され、岩槻城主太田氏資は北条麾下となる。

永禄十二年（1569）、能登守上田朝興は、北条軍の先手として出陣、相州三増峠に於て、甲州武田軍と戦う。大いに武勇を挙げたが、部下の松山勢に多くの死傷者を出した。此の戦に陣夫として徴された、松山新田（現神明町）に住む与四郎と云う者がいた。新妻を残しての出陣であつた。三増峠の戦で戦傷したのを、戦死と誤り伝えられた為に、新妻は悲嘆の余り、下沼に身を投じて死んでしまつた。一方与四郎は、重傷の身を押し新妻恋しさに、山に寝、野に伏して帰り付いて見ると、愛する妻は亡くなつてしまつた後であつた。脱陣の罪に服すよりほと、悲嘆のあげくに、上沼に飛込んで果てた。

街の人々は、之を哀れとして、以来その橋の事を女橋・男橋と名付け、下沼を女沼・上沼を男沼と異称する様になつた。仏心厚い先代城主上田朝直入道安独斎桑門宗調は、元龜二年（1571）、下沼女橋の際の比翼塚に経文を理め、法華經千部供養の経塚を建て、戦没部下の冥福を祈つた。今、神明町一丁目、清正公境内に移され建つてゐる、2・8mの南無妙法蓮華經の名号青石塔婆がそれである。（県指定史跡）

天正十年（1582）六月十九日、織田信長は甲斐の武田を滅し、西上州に滝川一益を関東管領として入部させたので、北武蔵の諸城主は相次いで織田の麾下となつたので松山城主上田朝興もその勢力下に入る。神奈川を狭んで織田と北条氏との大合戦が行なはれた時、織田軍の先鋒として乱戦の中に巻込まれ、城主上田朝興・同重直兄弟始め多くの戦死者を出した。然し間もなく本能寺の変により、滝川一益が引揚げたので、松山城主上田朝広（朝興の嫡子）は、他の城主と共に北条方に復帰した。

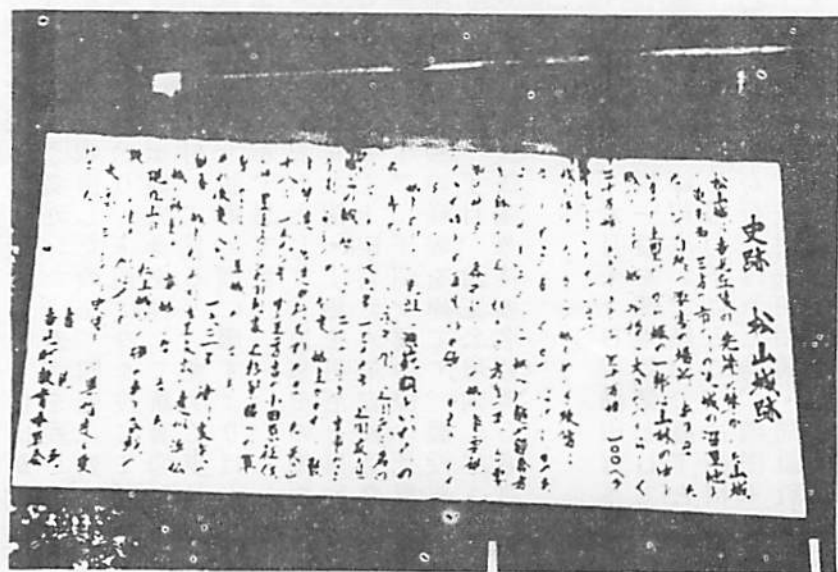
天正十三年、上州館林城、城受取の北条氏名代とし功有り。

上田氏は、領國支配を完成させると共に、近世城下町の先駆とも云うべき城下町を形成した。ようやく出来かかつて来た城下町は度々の合戦に破壊焼失を繰返された。鉄砲の出現するに及び、人的に即戦力として利用され、女子供に至る迄城内の陣夫として使役する様になつて来たので、必然的に人的資源として、城下町の繁栄が必要となつたものと思はれ、此の時代から城下町の育成保護が盛んになつた。

松山城付城下町は、今の東松山市街地ではなく、松山城寄りの、市川を狭んで城と相對する位置に發展した。その中心地は松山本郷と云い、上宿・下宿に分れて地名も残つている。市場も町民が自主運営する程に成長發展していつた。今に残る種々の古文書に、当時の様子が窺える。



松山城兵糧倉跡



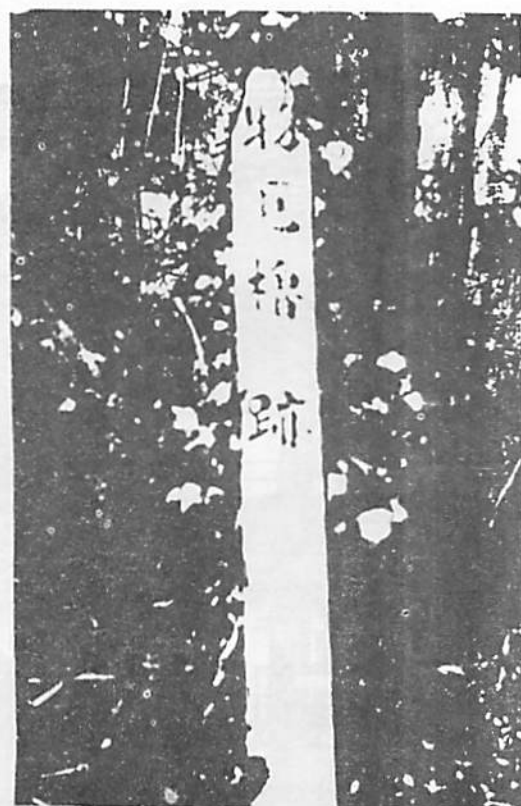
松山城跡説明板

天正十八年（1590）一月、天下は二転三転して、豊臣秀吉の掌中となる。秀吉に伏しない北条に対し、北条攻めを決し秀吉は全軍に督して出陣を促した。松山城主上田朝広は、小田原評定衆として召集され、その尽籠城と決し、徳川家康の寄せる、宮城野口の守りに付いた。松山城代上田憲定は領内全土に制札を出し、働ける者は全て城中に徴集し将兵五千余人、難波田・山田・金子・木呂子の四家老と計り各支城を捨てて本城一結、籠城の体勢を整えた。

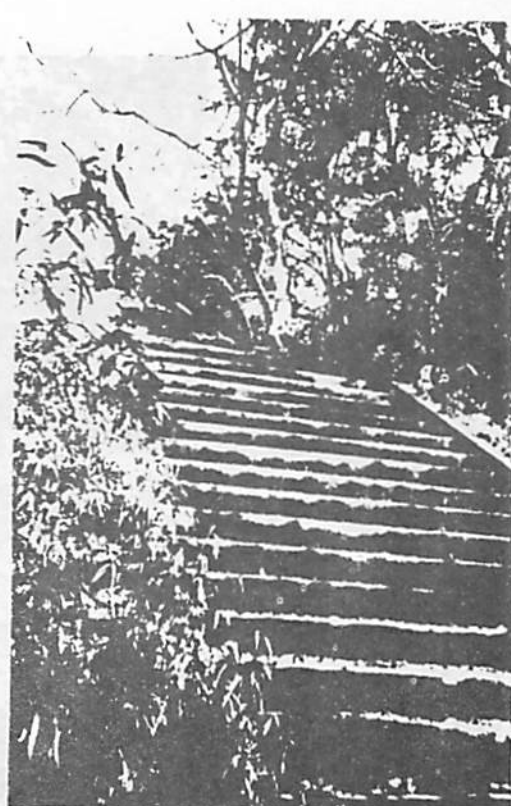
天正十八年四月十一日、寄手四万七千余外に上州降属諸城の兵併せて十万を越す大軍で総攻撃を掛けた。城兵五千は頑強に抵抗を続けた為、寄手に多大の傷手を与えた。寄手の前田軍の犠牲者の遺跡としては、長谷口に加賀谷・越中谷の名が残り、真田・上杉軍の犠牲者の遺跡として、流川羽黒山傍の首塚がある。攻めあぐねた寄手は、長谷の山上に大砲を据え付け城内に射ち込んだ、（今石砲台跡と云われる所）威力は凄じく、さすがの松山勢も抗する手楯も無かつた。一の丸・二の丸・三の丸を含む本曲郭と兵糧曲郭を残して、他の外曲郭・惣曲郭・穴曲郭・根古屋曲郭・広沢曲郭等悉く破壊し尽されてしまった。

然し城内の士気は少しも衰えず、女・子供・百姓・町人に至る迄、最後の一人迄もと戦つた。寄手は、吉見の妙光寺（現妙賢寺）の住職と上州の降将大導寺駿河守をして、説得に当らせ、此の度の寄手の副将上杉景勝は、上田氏の元の主家で、その麾下に入るは降参では無い元の主家に復帰するのだと説かれて、松山の諸将は遂に開城した。

同四月十六日、城兵は城を出て、鉢形城攻めの先手となり、松山城には小笠原貞慶の手勢が留守を預つた。



物見魚跡



松山城本丸正面階段

天正十八年四月三日、秀吉は、小田原城に対して総攻撃を掛けた。松山城主上田朝広は、宮城野口の守りに付き、力戦奮闘、嫡子十八歳の善次郎朝氏始め一族の上田越前守朝邦・上田左近進朝則等多くの一族郎党を討死させ乍らも、好く持口を堅持した。寄手の徳川家康軍を悩ませる事一通りでなく、家康は、朝広の首に恩賞を掛けた程であった。七月七日の総攻撃に、小田原は開城した。上田朝広は、家康の追吏の目を逃れて、僧形に身を替え単身にて、松山城迄落ちて来たが、城はすでに落ち人手に渡り、城に残した幼子又二郎は、鉢形攻めの途中、山田伊賀守の計いで安戸の浄蓮寺へ落たと聞き、祖父朝直の建てた元龜二年の経塚に背負つて来た法華経を供え、祖先の墓に此の転末を詫て、幼子のいる外秩父へと落ちて行つた。

幼子の守役関口忠左衛門の御堂館に亡命し、又二郎を関口氏の養子として上田家を絶家として余生を終つた。

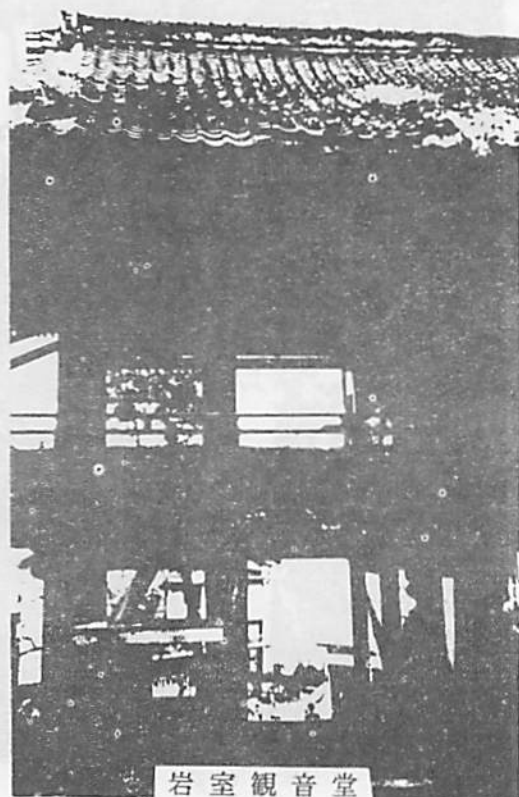
上田氏麾下の松山城衆の中で、山田伊賀守直安のみが、徳川旗本三百石として召出された。幕末の頃、首切り朝右衛門として有名な、山田朝右衛門は、伊賀守直安の子孫である。他の者は大部分松山本郷周辺の城地附近に土着したと云われている。

小田原落城後、北条氏の旧領を受領した家康は、天正十八年八月入部、その領地を天領・大名地・旗本地に大別され、松山領は、松平内膳正家広(一万石)が城主となり、城は、本丸・二の丸・三の丸と兵糧曲郭のみとし、他の諸曲郭は戦災の尽廃し、旧城士の土着用に開放した。

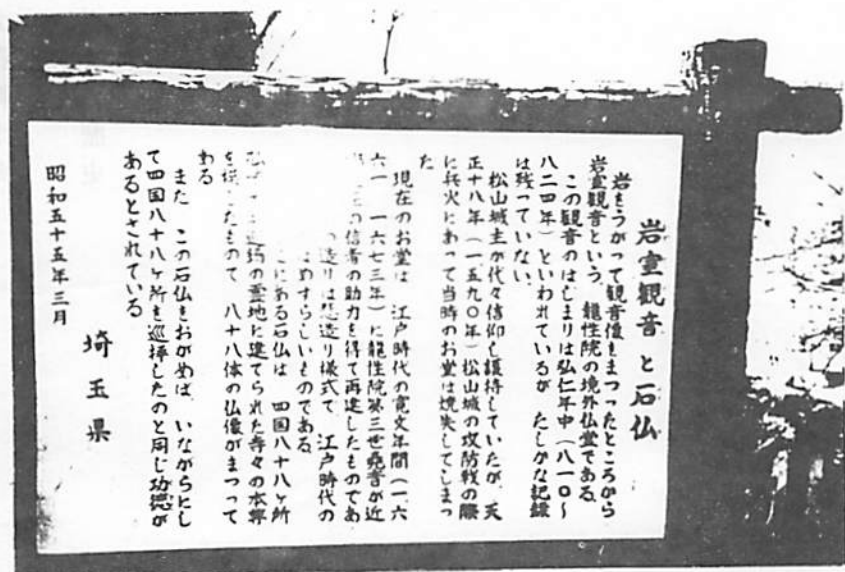
松平家広は、城主として善政を施したが、間もなく病に倒れた為、弟松平桜井左馬允忠頼に譲る。忠頼は、関ヶ原に軍功有り、五万石に加増され浜松城に移封となり、松山城は、慶長五年に廃城となつた。



憲重が駒の蹄跡



岩室観音堂



岩室観音と石仏

岩室がって観音像とまつたところから
 岩室観音という、龍性院の境外仏堂である
 この観音のはじまりは弘仁年中(八一〇)
 八二四年)といわれているが、たしかな記録
 は残っていない
 松山城主が代々信仰し維持していたが、天
 正十八年(一五九〇年)松山城の攻防戦の際
 に兵火にあつて当時のお堂は焼失してしまつ
 た
 現在のお堂は、江戸時代の寛文年間(一六
 六一-一六七三年)に龍性院第三世亮音が近
 所の信者の助力を得て再建したものであ
 る
 遷りは志道り様式で、江戸時代の
 ものである
 ここにある石仏は、四国八十八ヶ所
 の石仏の遺跡と建てられた寺々の本尊
 を模したもので、八十八体の仏像がまつて
 いる
 また、この石仏とおがわは、いながらして
 四国八十八ヶ所と巡拝したのと同じ功徳が
 あるとされている

昭和十五年三月

埼玉県

岩室観音の説明板



松山城附近の市ノ川

参考図書

東松山市史

日本城郭全集

郷土資料事典

群書類従

埼玉県史

主 催 昭和五十九年四月二十九日
案 内 者 越 谷 市 郷 土 研 究 会
印 刷 所 山 崎 善 司 筆
越 谷 市 弥 生 町 十二 の 七
越 谷 サ ー ビ ス 会 印 刷 所

武藏國比企郡松山正一位箭弓稻荷大明神畧縁起

夫倉稻魂神ハ百穀を插玉ふ故に奉_レ名所にして、此御神ハ誠に諸人を哀憐の御心深く、蒼生作物ハ艸の片葉までも百の災を穰除玉ふの御誓ひあり。亦曰、宇賀美多麻神ハ伊弉諾伊弉冊二柱尊所_レ生神、服機殿祝祭三狐神同座神也、故名專女神神代舊説
鎮座傳記亦委く日本紀神代卷を拜閱すれば、天照太神の神勅にて豊葦原中國有保食神を月夜見尊就候あり。其時保食神に對て月讀尊の非禮ありしかば、天照太神御怒甚く月夜見尊を咎玉ひて、復天熊人を遣して看玉ふ、此折節ハ早保食神の神功全成就して、其土地に稻麥粟稗大豆小豆の種悉く出生、牛馬を飼馴して農業の助力とする類ひまで教習ハし、有_二養蠶之道_一得抽絲など、凡後年の今の代に國民生命を保寒暑を防ぐ所爲までも丹誠せられ在よしを、天照太神の聞召て喜玉ふ事限りなく、保食神ハ萬民の盛になるべき基を開發く大功の神靈なりと賞し玉ふ。人皇四十三代元明天皇の御宇和銅四年 辛亥二月九日初午に當の日、山城國三峯に保食神と荷田神を合して稻荷と稱し祭ハ、殊更神靈の奇瑞在に依なり。是より益々保食神稻魂を世上一統に尊崇し、五穀成就を祈るに怠慢なく、神亦神通廣大に在バ大日本國中の山林田野に到るまでも垂迹ありて、百穀を經營し天下太平萬民豊樂の大業を司玉ふ最も尊き神靈なり。爰に當社正一位箭弓稻荷大明神と申奉るハ往古久しき垂迹にて靈驗感應牧擧違あらず。箭弓の名號の故を記せば、頃ハ人皇六十八代後一條院の御宇長元元年、下總國千葉の城主前上總介平忠常謀反を企、安房上總下總三ヶ國を切從破竹の如き勢ひにて威を八州に震ひ、四萬五千餘人の大軍を起し武藏國へと押出せり。此節冷泉院の判宦代源頼信ハ甲斐守に被_レ爲_レ任甲斐の國府に着玉ひし所、忠常追討の倫旨を賜り俄に軍の用意を調へ近郷の兵等を催し玉ふ。此頼信朝臣ハ源家の棟梁多田滿仲の御子にて頼光朝臣の御舍弟なりしかば、軍畧武勇兼備して心賢き大將なれども、甲府に下りて間もなく萬事心に任せぬ中に、平忠常が勢ひ遠近を靡く猛威盛の時なれば、頼信の催促に隨ひ寄者僣なり。然とて敵ハ程近き武藏野へ操出し、寺院民屋を放火して直に都へ責登_二つんと亂妨甚しかりければ、猶豫の軍配なりがたく、一族郎黨近郷の地侍些に五千餘人に不_レ過小勢のまゝに甲府を立て武藏國

へ入王ふ。忠常へ入間郡河肥の地に押出す。こゝにおめて頼信朝臣へ比企郡松山に陣を張、看使をもつて敵陣を窺へせらせらるれば、前上總介の軍兵へ長元元年より三年以來の戰場に自なる軍の調練、元來烈しき關東の氣質に備へる武邊の勇惣軍既に五萬に及び、月の名におふ武藏野に輝したる星兜尾花に等しき鉾長刀最見々しき形勢なれば、源氏の小勢の不知案内容易追討なりがたく、さすが武門に譽ある頼信朝臣も心を腦し聊猶預し玉へば、其手に從ふ兵等も敵の大軍に聽怖し勇威も怠りて看えたりしが、頼信朝臣の在ます本陣の傍に最年經たる祠有。頼信是を見そなへして在所の老人を呼出し當社へ何の神なりやと問はせ玉へば翁は答て、此御宮居へ野久稻荷大明神と申て此野に久しき御神にて、本地へ十一面觀世音に在ます由を答しかば、頼信朝臣へ聞し召て夫へ饒幸の事にこそ野久へ則弓箭にて弓箭探身に因有、殊に十一面觀世音へ神通の化現なり、怖畏軍陣中衆怨悉退散の經説へ空しからず、通れ神通力の冥助に依て怨敵退散なさしめ玉へと、朝敵退治の願書を呈し、太刀一振俊馬一疋を神前へ奉納せられ、一終夜の御祈願有て其曉に軍勢を調へ正し、最嚴重に進發あれ、明行空に自ら雲の景色の白羽の箭と見ゆるが如く薄羅で、一陣の風颯と吹立敵陣の方へ彼雲へ箭を射さまに飛行け、源氏の諸軍へ勇立思はず雄詰を上互に心を勵せ、大將頼信欣然と軍配とりて眞先に走出し、神力應護の勝軍へ此奇瑞にて知らるゝぞ、進々と下知あれ、宦軍一同に勢ひ烈しく心を一致に五千餘騎、平忠常が屯に押寄唯一戦に敵の大軍を討破り頌て、賊黨を三日三夜追討し悉く亡しかば、偏に弓箭の神徳と頼信喜悅不斜、社殿を再建仕玉へり。此時より彌々益々神威靈驗炳然諸願満足の就中盜賊の難を除福徳圓滿の開運を司り玉ひて、其御利益を蒙る者日々月々に充満せり。然ハ寶徳三年二月初午に河肥の左金吾持資主の心願成就の法樂を捧げられ、文明年中まで年毎の祭禮をも太田道灌よりして執行せられしとぞ、亦松山の城主上田氏難波田氏も康正年中より代々の領主違尊信尤厚かりき。抑松山の地へ人皇百三代後花園院の御宇康正元年三月關東の管領扇ヶ谷の上杉持朝の旗下の老功太田道眞の差圖によつて、同じく扇谷の大將上田左衛門尉築て籠城せしが、寛正二年六月下旬前左兵衛佐成氏下總國古河の城より打て出、小山宇都宮結城の諸將武藏の七黨是に與し大軍にて責掛りしゆゑ、暫時開城して上田へ鎌倉に備を立たり。同年の九月成氏

と上杉方と越ヶ谷野に戦ひ成氏敗軍なせしか、關東悉く管領家の下知に従ひ、松山の城へ以前の如く上田左衛門尉これを守る。其後長享元年正月より同二年の夏まで兩上杉家不和となり松山に對陣せしが、終に山内の上杉敗軍して松山方勝利を得たり。是より二年の後延徳元年六月十八日山内上杉顯定と扇谷上杉定正と再度武州入間郡河越の地に戦ふ。此時松山の城より上田新藏人曾我兵庫助扇谷の加勢として押出すと異本殘太平記に記されたり。されば上田氏へ松山を築立られし以來康正長祿寛正文正應仁文明長享延徳明應年中まで、四十餘年が間箭弓の御社の神徳を蒙りしこと少からず。其後永正元年兩上杉の河越合戦の時より上田氏へ鎌倉に在て、同じ扇が谷の大將難波田彈正忠其子彈正左衛門、父子天文年中まで四十餘年松山の城を守りて變らず、當社の靈驗を尊まれけるが、天文十四年に河越の城に移り松山ハ二年の間明城となれり。難波田氏の舊館ハ新座郡宗岡の町よ
り十八丁西北にあり今南畑といふ 天文十六年よりして小田原北條家の幕下上田能登守入道安德齋初名ハ上田又次郎といふ 松山の城主たりしが、十五年を経て永祿四年の九月武州岩築の住人太田美濃守三樂齋入道資正越後勢と同意して松山の城を責取、上杉憲勝を大將にて二千餘人を遣らせ、資正ハ岩築に引上たり。同年の十二月十一日甲州勢と北條方と一致して松山の城を五萬五千餘人の大軍にて責立しかども、要害無双の名城にて太田資正が手配をなし置たる下知なれば寄手の大軍責あぐみて落し得ず。翌年の永祿五年甲州の飯富源四郎景仲といふ者和談をとりむすび、城主憲勝ハ北條家に縁を結び都築部にて三百貫を領し、永祿五年三月より元の如く上田安德齋城主となり天正十八年まで二十九年が間安德齋の子息上田上總介松山の城主なり。如く斯城主も度々混雜して關東の兵亂止時なく、別て川越松山の地ハ武藏國中に屈竟の戰場なりしゆゑ、やゝともすれバ兵火の爲に燒討せられ神社佛閣の尊きも大破衰廢して影も残らぬ土地さへありけり。此故に當社も漸々に衰微して野中の小社となり近き邊に住庵主の僧が神前に一燈を供するを往昔の萬燈に代たり。斯て天正十八年神武の神營を江都に開かせ玉ひしより、百有餘年の星霜に廢亡したる關東の神社佛閣君の御恵に再興して、舊地に勝る繁昌となりし事最難有御代なりけり。再說當社の中興を尋奉れば今を去事二百二十五年の昔人皇百九代後水尾院の御宇元和

二年、南光坊天海大僧正駿府より下野國へ神輿を守護し趣せ玉ふ御道筋當松山の地を御通行の折節、一天俄にかき曇風雨一陣烈しかりければ、神輿を庵室に入奉り晴るを待せ玉ふ時しも忽然として威風殿々たる老翁手に弓箭を携へ庵室の庭前を守護する如く現れたり。僧正ハ奇異の思ひにて彼翁に向ひそも老翁の何人にて何故に此所へ來られしぞと問ハせ玉へバ、老翁答て曰、我ハ人類にあらず稻魂の神使なり今僧正の警衛し玉ふ御先を掃除して非常を靜むる役を勤め、當野に久しき住所を全せん事を願ふと告終て忽に影を止す、此時風雨靜りて最朗なる晴天となりぬ。依之天海大僧正ハ庵室を呼出して神人の告を語り庵に近き當社の由來の舊記を尋ね玉ひ其神靈を尊ミ社の造營をはからハせられ、則庵を一寺に取立玉ひ福聚寺といふ寺號を賜りて、庵主を別當職に補せらる。夫より以來神威年々に盛にして靈驗感應響の物に應ずるが如し。然バ寛保年中御地頭嶋田氏の心願成就あつて宮社の修覆あり。其後十三世の別當堯順大志願を發して本社拜殿往古の壯觀に勝らん事をはかる。然れども大業なるに依て不容易、此時ハ寛政五丑年の事なりしが神靈の神通にて別當堯順へ夢中の爾現あり、我齡既に二千九百餘年に及び結縁の時熟すと告玉ひしが、奇なるかな其頃より遠近の貴賤當社の御利益尊き事を知り傳へ、心願満足の時を得て招ざるに歩行を運び神徳を蒙る者牧擧がたし。こゝにおゐて自然神威光々として朝日の輝くに異ならず。此度本社拜殿の修造悉く成就して舊年に勝る御社となりし事全神徳御利益の故に依とハいへども、一ツにハ信者講中の寄進丹誠の致す所なり。於此當社の由來を本縁起の中より畧記して普く諸人に告まらせ、其御利益を蒙らせ度神亦人々の崇敬に威徳彌増の感應あらんこと愚衲が丹心こゝにありといふ

于レ時天保十一 庚子年九月良辰

武藏國比企郡松山筋弓ノ御社別當

中興開山祐辨ヨリ十五世

法音山多聞院福聚寺堅者法印順性謹誌